

はじめに

レッチワースはE.ハワードが 1902 年に著した『Garden City of Tomorrow』に基づいて建設された世界で最初の田園都市である。場所はロンドンーキングスクロス駅の北方3.5 km、ヒッチンとバルドックという小さな村落にあり、その基礎が築かれたのは田園都市の賛同者によって組織された 1903 年 11 月 3 日の第一田園都市株式会社・専門会議である。1904 年 7 月にはBaldock Roadで最初の коттеージ 20 戸が建設されている<sup>1)</sup>。2002 年には設立から数えて 100 年目の住宅地生誕を迎えており、現在でも訪問者が絶えることのない世界有数の住宅地である。

ちなみに日本との関係で言えば、日本人が最初にレッチワースを訪れたのは 1906 年である。当時、東京府の府県課長であった井上友一と社会改良家の長谷川久一が最初に現地を訪れている。1908 年には内務省地方局嘱託技師であった生江孝之が『田園都市』刊行(1907)の翌年にレッチワースを訪れて、E.ハワードと面会したレポートを残している<sup>2)</sup>。その後、多くの日本人がレッチワースを訪れており、このようにレッチワースの存在が日本人に早くから知られていた背景には、E.ハワードの知名度も然る事ながら、そこでの事業が革新的で実験的な試みに満ちていたからであろう。内務省官僚がレッチワースを訪れた 1900~1910 年代はレッチワースが開設されて間もない時期である。その間もない時期にも関わらず、多くの日本人がレッチワースに関心を持ったのは、そこで大きなイベントが開かれていたからと考える。そのひとつが 1905 年と 1907 年に開催された "Cheap Cottage Exhibition" であったと考えている。

# 1. "Cheap Cottage Exhibition"

"Cheap Cottage Exhibition" はレッチワースで開催された実物展示の住宅展覧会である。この展覧会は 1905 年と 1907 年の 2 回開催されており、前者を "Cheap Cottage Exhibition"、後者を "The Urban Cottage and Smallholding Exhibition" と読んでいる。この展覧会の開催目的は、労働者に低廉なモデル住宅を提示して労働者住宅への啓蒙を図ることである。そのためここでは二つの展覧会を "Cheap Cottage Exhibition" と読んでおく。

これらの住宅展覧会は労働者に理想的な低廉住宅の普及を促すために、第一田園都市株式会社がデモンストレーションとして開催したものであった。展覧会の企画者は雑誌『The Spectator』の編集者であり、「County Gentleman and Land an Water」の事業主でもあったJ. St.レオ・ストラチェイである。ストラチェイは展覧会の開催後に『The Book of the Cheap Cottages Exhibition - A Complete Catalogue with Plans - 』<sup>3)</sup> というカタログをまとめており、そこから展示された住宅の内容を知ることができる。カタログに収録された記事によれば、当時のロンドン郊外は建築資材が高騰し、それが労働者の住宅配給に悪影響を及ぼしていた。各地方自治体はその改善を図ることを急務として上げており、低廉な労働者のためのモデル住宅を建設することが必要であった。第一田園都市株式会社ではそれらを提示し、併せて地方自治体に対して啓蒙を促すことを目論んでいる。そのため建設に当たっては、労働者住宅に対する建設コストの標準的な価格を設定することが必要であった。「In



図 1 Cheap Cottage Exhibition 当時の写真 (First Garden City Heritage

A study on the "Cheap Cottage Exhibition" held in the Letchworth First Garden City Estate in 1905, 1907

Search of a £150 Cottage」<sup>4)</sup>によれば、建設コストの最低基準は£150に設定されている。この値段は1900年当時の相場で換算すると、£1がほぼ10円であったと言うから、日本では150円程度の住宅という勘定になる<sup>5)</sup>。その価格の範囲内で、より安全で、より快適で、より衛生的な住居を建設しようという試みであった。低廉ということを最も基本に据えた、労働者のための野心的な試みであったと考えられる。

改善住宅に求められた内容は以下のような項目である<sup>6)</sup>。

1. リビングルームの数・・・居間が一部屋とスカリイ（食器洗い場）または台所スカリイを所有していること。
2. リビングルームの高さ・・・7ft 6inより低く過ぎないこと。
3. ベッドルーム・・・三部屋に暖炉を二つ備えていること。
4. ベッドルームの高さ・・・7ft 6inより低く過ぎないこと。
5. ベッドルームの広さ・・・2000ft

ここで展示された住宅は、デタッチ、セミ・デタッチ、3戸～4戸建てのグループ・コッティジの3種類に分かれている。住居の等級も～まで4クラスに分かれており、建設コストの標準も各クラスによって以下のように異なっている。

クラス・・・2部屋以上を含んだデタッチまたはセミ・デタッチ

クラス・・・5部屋（スカリイまたは台所スカリイを含む）を持ったコッティジで、建設費用は£300を超えないこと。

クラス・・・3戸建てまたは4戸建てのコッティジ・グループで、1戸のコッティジがスカリイを含み6部屋を超えないこと。建設費は一部屋£35以下であること。

クラス・・・デタッチまたはセミ・デタッチで、それぞれがスカリイを含んで6部屋以上にならず、建設費は一部屋£35以下であること。

ちなみに、この展覧会では理想に近い住居に対して1等賞金£100を与えるという、興味深い試みが取られている。賞与は住宅の設計者ばかりでなく、建具サッシや、材料メーカーにも送っており、外観のデザイン・設備・快適性といった美的・機能的側面ばかりでなく、低廉を主とする材料の適合性にも評価が与えられたことが判る。表1はカタログに掲載された各クラスの住宅を示している。住居タイプは、（クラス1）がデタッチとセミ・デタッチ、（クラス2）がデタッチ、セミ・デタッチ、グループ・コッティジ、（クラス3）はグループ・コッティジ、（クラス1）がデタッチ、セミ・デタッチで構成されている。各クラス毎に住居タイプが異なっていたことが判る。建築材料はほとんどが煉瓦積みである。なかには木造、中空ブロックなど、イギリスで馴染みのない建築材料も含まれている。

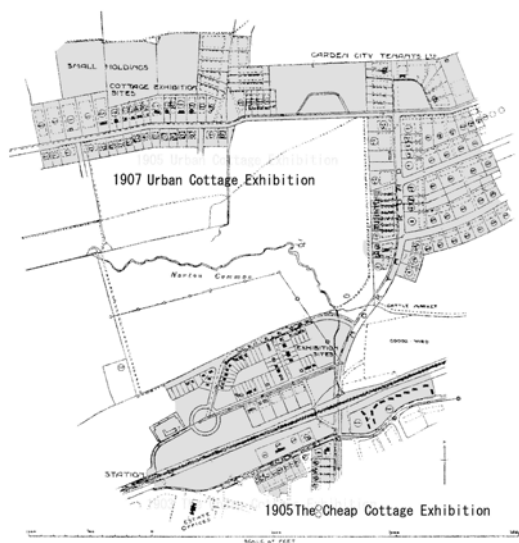


図2 展覧会全体図

\*James Cornes 『Modern Housing in Town and Country』1905（Letchworth Garden City Museum）を元に作成



図3 Letchworth 全体地図

（First Garden City Heritage Museum 所蔵）

表1 Cheap Cottage Exhibition 出品住宅一覧

Class	形態	室構成	外壁仕様	建築費	棟数	戸数	
Class1	Detached	L+S C+3BR	木材、セメント	£ 150	1	1	
			セメント	£ 145	1	1	
				£ 150	2	1	
				£ 256	1	1	
			レンガ	£ 145	1	1	
				£ 135 4s.	1	1	
				£ 150	3	1	
				£ 149	1	1	
				£ 140	1	1	
				£ 148	1	1	
				£ 150	1	1	
				レンガ、セメント、ラフキャスト	£ 145	1	1
			ラフキャスト	£ 150	2	1	
			中空コンクリートブロック	£ 148	1	1	
			コンクリートブロック	£ 150	1	1	
			木	£ 150	1	1	
				£ 149 12s.	1	1	
			ウェザーボード	£ 150	1	1	
		金属		£ 148	1	1	
		L+K+3BR	コンクリート	£ 150	1	1	
	P+SC+K+3BR		コンクリートスラブ	£ 150	1	1	
	L+P+SC+2BR		レンガ	£ 150	1	1	
	L+P+SC+3BR		ラフキャスト	£ 150	1	1	
	Semi-Detached	L+SC+3BR	コンクリート	£ 300 ( £ 150 )	1	2	
P+K+3BR		レンガ	£ 300 ( £ 150 )	1	2		
Class2	Detached	L+SC+3BR	レンガ	£ 150	1	1	
		L+SC+3BR	レンガ	£ 150	1	1	
			£ 300	1	1		
		L+P+3BR	レンガ	£ 300 ( £ 150 )	1	2	
	Semi-Detached	L+P+SC+3BR	中空コンクリートブロック	£ 230 ( £ 115 )	1	2	
			セメント、ラフキャスト	£ 300 ( £ 150 )	1	2	
		Group Cottage(3)	P+SC+K+3BR	レンガ、ラフキャスト	£ 402 ( £ 134 )	1	3
	Class3	Group Cottage(3)	L+SC+3BR	レンガ	£ 525 ( £ 175 )	1	3
		L+SC+2BR	レンガ	£ 600 ( £ 200 )	1	3	
Group Cottage(4)		L+SC+3BR	レンガ	£ 762 11s.( £ 190 )	1	4	
		L+SC+4BR	レンガ	£ 600 ( £ 150 )	1	4	
Class4	Detached	L+P+SC+3BR	レンガ	£ 150	1	1	
			中空コンクリートブロック	£ 135	1	1	
		P+SC+K+3BR	コンクリート	£ 200	1	1	
		L+SC+K+3BR	レンガ	£ 210	1	1	
		L+SC+2BR	木	£ 150	1	1	
		P+SC+K+3BR	レンガ	£ 110	1	1	
	Semi-Detached	L+SC+F+3BR		£ 200	1	1	
				£ 400 ( £ 200 )	1	2	
				£ 414 ( £ 207 )	1	2	
				£ 210 ( £ 105 )	1	2	
		L+P+SC+3BR	レンガ	£ 369 1s.( £ 185 )	1	2	
			ラフキャスト	£ 369 1s.( £ 185 )	1	2	
			L+SC+3BR	レンガ	£ 300 ( £ 150 )	1	2
			P+SC+K+3BR	レンガ	£ 400 ( £ 200 )	1	2

L : Living room, SC: Scullery K : Kitchen P : Parlour F : Front room BR : Bedroom

このなかで最も評判を呼んだのが、中空ブロックのコンクリート住宅と下見板張りの木造住宅である。コンクリート住宅はポートランド・セメント会社製の施工で完成させられている。中空ブロックは工場で生産し、それを現場に持ち込んで組み立てる方式を取っており、職人の手を省いた低廉コストを考えられていたことが判る。木造コテージは農業労働者への住宅改善を促した住宅である。アメリカのツー・バイ・フォーと同じ工法を取り、バンガローと呼ばれている。ここでは建設コストの

低廉は勿論のこと、伝染病を回避する外気との接触、通気性を主とした衛生管理に注意を促している。これら両タイプの住宅には特別賞金 £ 5 0 が与えられている。当時のイギリスでは画期的な労働者向き住宅と考えていたことを知ることができる。

### 3 . 二つの展覧会

1905 年の “ Cheap Cottage Exhibition ” は農業用地である Norton Common の北側で、1905 年 7 月～ 9 月の



図4 Cheap Cottage Exhibition カタログ  
(First Garden City Heritage Museum 所蔵)

2ヶ月間で開催されている。見学者は自転車、徒歩、自動車、ロンドン・キングスクロス駅から往復切符で来る者さまざま、延べ 80,000 人が訪れている。“Cheap Cottage Exhibition”の住宅は 124 棟が建設されている。当時のカタログと現在を照合すると、Exhibition Road、Cross Street、The Quadrant、Icknield Way、Wilbury Road、Birds Hill には 118 棟の住宅が残されている。これらの住宅はピクチャーレスな景観を残しており、田舎町であるレッチワースを都会人に知らしめる為に宣伝効果を狙って開催されたことも考えられる。



図5 現存する Cheap Cottage (筆者撮影)

一方、1907 年の “The Urban Cottage and

Smallholding Exhibition” は “Cheap Cottage Exhibition” の成功に気を良くして実施されたものである。展覧会の企画は住宅地プランナーであった Reimond Unwin が、Lytton Avenue を主会場として行っている。展覧会場は曲線道路を取り入れるなど、景観的要素を狙っている。しかし住宅は至って平凡であり、ほとんどがタイル屋根を持った 6 棟連続のレンガ造住宅である。建設コストは 2 寝室付きが £175 以内、3 寝室付きが £200 以内、労働者用については上限がなく、展覧会の趣旨は前者よりも後退したものとなっている。1905 年の “Cheap Cottage Exhibition” 以降、ロンドンでは実物展示の展覧会が頻繁に行われるようになったと言われている。それだけ見ても、“Cheap Cottage Exhibition” の果たした役割は大きい。 “The Urban Cottage and Smallholding Exhibition” については “Cheap Cottage Exhibition” 程に注目されることが少なかったと思われる。

#### 4. まとめ

日本で住宅改善運動が現れるのは 1920 (大正 9 年) の住宅改善調査会からである。その主眼は欧米にあるバンガロー住宅の普及にあり、平和博「文化村」(1921 年) では 14 棟のバンガロー・モデル住宅が実物展示されている。そこでは建設コストの上限価格が設定され、中空ブロックのコンクリート住宅が見られるなど、低廉による洋風のモデル住宅の普及を目論んでいたことも考えられる。また住宅改善調査会の前年の「生活改善展覧会」ではレッチワースの図面、田園都市の理想図などが展示されている。このように日本の低廉モデル住宅展覧会はレッチワースの “Cheap Cottage Exhibition” と類似する点が多い。日本の洋風バンガロー住宅はアメリカを手本に発展してきたと言われている。しかし、日本の大正期における実物展示のモデル住宅を見ると、イギリスの労働者を対象としたモデル住宅からの影響を受けていた様子を見ることができる。このアイディアが日本では誰により、どのような経路を経て日本に伝わってきたか、これらは今後も煮詰めて行かなければならない点ではあるが、本編ではひとまずレッチワースでの “Cheap Cottage Exhibition” の特色を指摘して結論としたい。

(註)

1) *THE GARDEN CITY*, C.B.PURDOM, 1913, J.M.DENT & SONS Ltd

2) 大正期における東京近郊の田園都市事業に関する研究 (博士論文) 藤谷陽悦、1996

3) *THE CHEAP COTTAGES EXHIBITION*, “THE COUNTY GENTLEMAN AND LAND AND WATER,” Ltd, 1905

4) In Search of a £150 Cottage, *THE CHEAP COTTAGES EXHIBITION*, P7, J.ST.LOE STRACHEY, 1905

5) 当時の物価水準は、巡査の月給が 10 数円であった。£150 は約 1 年超の給料と同額であった。

6) How the Exhibition Game About, *THE CHEAP COTTAGES EXHIBITION*, P11, “HOME COUNTIES”, 1905